



鎌土 重晴

一般社団法人東北経済連合会 参与

産学官協働による実践的な人材育成について

社会、経済が高度化・複雑化し、グローバル化が進展する中で、活力ある社会を築き、国際社会での競争力を維持・強化していくためには、多様な社会の要請に対応できる人材や、イノベーションを創出する創造性豊かな人材が不可欠とされています。大学には、それに応える実践的な人材の育成、すなわち職業上必要な知識・技術や意欲等を身につけ、社会のさまざまな分野で活躍することのできる人材を育成することが期待されています。

長岡技術科学大学では、このような要請に応えるため、1970年代の開学当初から産学官協働による実践的技術者の養成を目指して、実践的な環境下として学部学生を企業現場等へ派遣し、技術開発を主眼とした教育プログラム（以下、「実務訓練」と略す）の実施を通じて、実践的な人材育成を目指しています。その内容について紹介させていただきます。

実務訓練は、企業、公団、官庁の現場で活動する人々と交わり、現場指導者の監督のもとに自らもその活動に参加することによって、「技術に対する社会の要請を知り、学問の意義を認識するとともに、自己の創造性発揮の場を模索すること」と「実践的・技術感覚を養うこと」を目的としています。具体的には第4学年で大学院修士課程進学予定のすべての者、約350名程度の学生に必修科目として履修してもらい、約5ヶ月間、企業等の現場で実務を行い、これによって得られた成果をもとに、大学院修士課程での研究テーマや職業への基礎的な認識を経験させ、将来の技術の創造展開に大きく役立たせようとするものです。開学当初から行ってきたこの実務訓練は、一般的な就業体験として行われているインターンシップとは大きく異なります。平成元年度は、北は北海道から、南は九州に至る国内企業等の223機関に280名、その他東南アジア、ヨーロッパ、北米等の海外企業や学術交流協定を締結している海外大学等の45機関に65名を派遣しました。

実務訓練を終えた学生のアンケート結果では、「自身の現状の専門力と今後必要な学力の認識」に加えて、「企業の厳しさ、大学と違う価値観を発見した。挨拶やコミュニケーション、時間厳守の重要性を知った。仕事の進め方、開発の難しさを知った。自分を変えるきっかけになった。自己評価し、自分の適性がわかった。」等の意見が多かったことから、本実務訓練が人間力を高めることに大変有効であるとともに、大学院ですべきことを明確にし、今後のキャリアパスを考えるきっかけともなっていることが証明されています。

以上のような取組に加えまして、平成30年度文部科学省「卓越大学院プログラム」に採択されたことをきっかけに、新産業の創出に資するグローバル人材育成に取り組んでいます。本プログラムの特色は『反復実習』で、学生は企業でのプロジェクトリーダー実習に加えて、大学・研究所での海外リサーチインターンシップを行い、そこでの反省点（気づきや失敗経験）を生かして学び直し、その後企業及び大学・研究所の両方でもう一度実習を経験します。組織のリーダーとして必要な素養の獲得と問題解決実証の体験を通じて、失敗を伴い克服する過程を現場で積むことのできるプログラムとなっており、社会で通用するタフな人材を育てようとするものです。今後は、大学院での企業、海外リサーチインターンシップを全学に拡大し、グローバルに活躍できる高度な技術者養成を目指す所存です。これまでと同様、実践的な人材育成におきましても、産業界からのお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

（長岡技術科学大学 学長・かまど しげはる）